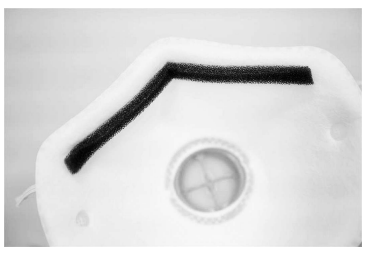
日本バイリーン

防じんマスク分野で高まる存在感

日本バイリーンは、1961年に衣料芯地の生産を開始し、順次事業領域を広げてきた。70年代に参入したマスクは、優れた捕集性と通気性の両立という機能性が産業分野などで評価を獲得し、主力商品の一つに育っている。サービス面の充実も図っており、存在感を高めている。

製品の性能に加え、サービスも


新開発の鼻当てスポンジ

同社のマスクへの参入は、71年の打ち抜きマスク生産に始まる。大きな転機は、使い捨て防じんマスクで国家検定に合格した88年だった。以降は新国家検定合格品の発売、米国労働安全衛生研究所（NIOSH）認定N95適合マスクの展開など、機能性向上やバリエーション拡充を図っていく。

現在、産業用の防じんマスクは同社の主力商品の一つとなっている。じん肺などの健康被害を防ぐための保護具である産業用防じんマスクは、溶接ヒュームや粉じんなどが発生する現場での着用が義務化されている。厚生労働省が定めた国家検定規格「DS2」への適合・登録が求められる。

国家検定合格品の中でも販売が伸びているのが「バイリーンマスクX―3502FT」だ。従来の使い捨て防じんマスクをバージョンアップし、2025年4月に発売した。新開発の鼻当てスポンジが空気の漏れを防ぎ、ゴムひもの改良で使いやすさが向上した。快適な装着感などの特徴も持つ。

昨年10月には「FTシリーズ」に新製品を追加した。活性炭フィルターを組み合わせた「X―3762FT」、12㍉でシリーズ最軽量の「X―1302FT」を用意する。いずれも特殊帯電技術による高い捕集効率と呼吸のしやすさを両立する高性能フィルターを用いている。粒子捕集率は95・0％以上を誇り、吸気抵抗値は50Pa以下（X―3502FT）、排気抵抗値は50Pa（同）という値を示す。12時間使用できる（X―1302FTは9時間）。

「バイリーンマスクX―3502FT」

東京工場で一貫生産

高い性能や品質はもちろんながら、東京工場（茨城県古河市）で一貫生産していることも強みとなっている。新型コロナウイルス禍下にマスク不足に陥った際も部材から一貫生産する同社では継続的に生産することができた。安定供給体制を確立していることは大きな利点となっている。

今後の拡販に向けて、フィットテストもポイントになるとしている。作業中に発生する溶接ヒュームによる健康被害を防ぐことを目的に行われるのがフィットテストだ。金属アーク溶接などの作業を屋内で継続して行う事業者に対して23年4月に義務化された。

FTシリーズの鼻当てスポンジは、従来のEXシリーズとは柔らかさや厚みが異なるという。フィット性が向上し、装着指導がなくてもフィットテストで高い合格率を誇るという。同社はフィットテスト用機械を4台保有しており、顧客の要望があればサービスの一環としてテストも実施する。

東京工場で一貫生産

ヘルスケア営業部
産業資材担当部長

宮崎 輝 氏

「バイリーンマスクX―3502FT」を軸に高性能な使い捨て防じんマスクを製造・販売する日本バイリーン。性能や品質に加えて、一貫生産による安心感もユーザーから支持されている。産業資材第一事業部メディカル資材本部ヘルスケア営業部の宮崎輝産業資材担当部長に現状と今後を聞いた。

合格率100％のマスクを

◇

――防じんマスクの担当一筋なのですか。

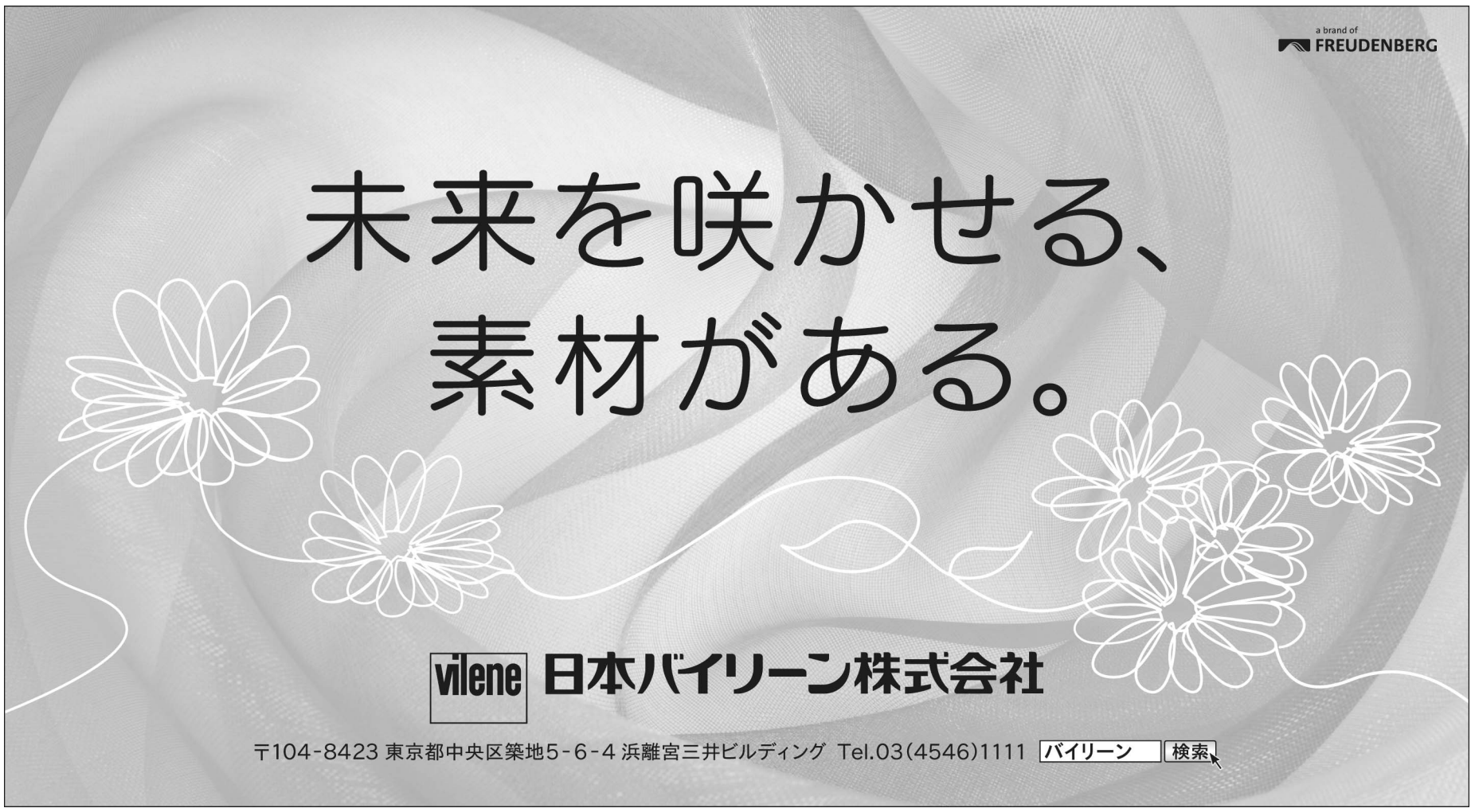
日本バイリーンに入社して20年間はアパレル資材の販売に携わりました。2013、14年ごろに産業資材（マスク）の販売に異動しました。アパレル資材は材料ですが、マスクは身に着けます。全く違う世界なので最初は戸惑いました。

――現在の販売状況は。

FTシリーズは、特別な装着指導を行わなくてもフィットテストで合格率90％を誇ります。ただ、これで十分ではありません。限りなく100％に近づけられるマスクの開発を目指していきます。

昨年の4月に発売した、バイリーンマスクX―3502FTは、捕集効率に加えて、ノーズ部分やゴムひもアジャスト機構などにもこだわった仕様になっています。定番品として使われ、順調な動きを見せています。10月に投入したシリーズも当社従来品からの切り替えが順次進んでいます。

FTシリーズは、特別それぐらいの製品を作らなければシェアは高められないと思っています。

――マスクでの暑熱対策は可能なのでしょうか。

国家検定に合格した防じんマスクを販売しています。検定に合格するには〝余分〟な機能を付けるのは難しいのが実情です。ヘルメットや帽子、襟首に貼る「汗とりパッド」を展開していますので、マスクとセットでの販売を増やしていければと考えています。